

目次

寄稿: 国際社会で活躍するための武器 (遠藤 礼子)	1-2	告知: 2015年、夏の海外大学院留学説明会のご案内	5
寄稿: ニュージーランドPh.D.生活 (川岸 由)	3	連載: 大学院ランキングの読み方と研究室の選び方 (加藤 雄一郎)	6-7
寄稿: Life as a Ph.D. Student and an Assistant Professor in Economics (菅谷 拓生)	4-5		

寄稿: 国際社会で活躍するための武器

Massachusetts Institute of Technology
遠藤 礼子

日本の小さな町の中学校から、高校では市に出て県立高校に通い、大学では東京に出て国立大学に通いました。ある意味、町→県→国の延長線のような形で、大学院で海外に出ることに不必要に高い障壁を抱えていませんでした。現在はMITの博士課程に在籍して4年目で、将来は世銀や国連等の国際機関で開発支援をしたいと考えています。まだまだひよこの私ですが、「アメリカにある1つの大学」でなく、「国際社会」でうまくやっていくために必要だと思うことを、ここで話できればと思います。

専門知識=議論のテーブルに着くための資格

国際社会で活躍するために、と聞いて、コミュニケーション力やマネジメント力といったソフトスキルに関する話を想像するかもしれませんが、まずはここから始めます。国際社会でやっていくには、「専門知識」があったほうが確実にいい。もちろん必要条件にすぎませんが。実は私、MITに在ながら、最先端技術というものに興味がなく(大学院出願時のエッセイにも大胆ながらそう書いています)、将来研究者になるつもりはありません。興味があるのは(=大事だと思うのは)、技術をいかに社会にインテグレートさせていくかという、ソフトスキルです。自分はスペシャリスト肌ではなく、ジェネラリスト肌だと思っています。それでいて、国際社会で活躍するための武器のはじめに挙げるのは、専門知識。どういうことかという、ジェネラリストというのは世の中にたくさんいて、エントリーレベルでは自分の強みを見せることができにくい。一方で、スペシャリストというのは、自分の専門知識というカードがあるので、まずは議論のテーブルに呼ばれやすい、ということです。いったん議論のテーブルについて、議論が進んでいくと、いろいろな物事、視点を考えられるようなジェネラリスト的な能力も必要になります。まずエントリーポイントで評価されやすいのは専門性です。学

科のセミナーに行っても、国際会議に行っても、議論の中に、「自分はこういう知識・経験があって、その立場から言うとこのようなことが考慮されるよね」というような発言は非常に強く響きます。

表現力、アウトプットのカ

能ある鷹が爪を隠して、その爪に気づいて評価してくれるのは日本。その爪を、とった獲物とともに見せつけるのが国際社会。そんな横柄な、と思われるかもしれませんが、きちんとアウトプットするというのは大切な力です。移民等が少なく、人口のほとんどが文化を共有する日本では、言わなくてもわかってもらえる感、見えないところで律儀に仕事をこなす美德があるかもしれませんが(バイアスめです)、バックグラウンドの異なる人と一緒に仕事をする国際社会では、自分のことを自分で正しく(誇張気味に?)アピールする力は非常に重要です。

日本の履歴書とアメリカの履歴書は大きく異なります。日本の場合は鷹の属性を書きつなれます。どこでトレーニングを「受け」(大学、会社)、どのような資格を「与えられた」か。アメリカの場合は、鷹が実際にどんな爪を使ってどんな獲物を獲得したのかに焦点が当たります。どこでどんなトレーニングを「行った」ことによって何を達成できたか、どのような資格を「取得」したことによってどんな変革が可能なのか。さらに、気づいていただけたかと思いますが、日本とアメリカの履歴書では、記述する内容も違えば、書き方も異なります。アメリカの履歴書では、「受けた」のようなpassive verb(受動的)ではなく、「行った」のようなactive verb(能動態)を用います。ぜひみなさん、海外ではCV(Curriculum Vitae)がどのように書かれるか、チェックしてみてください。

履歴書の違いの例は、日常的にアウトプットをどのような形で行うかということにも反映されていると思います。毎日友達と会話を

するたびに爪自慢、獲物自慢をしているわけではありませんが、海外ではそういったアウトプットの機会が日本に比べて非常に多いと思います。自分の考え、能力、成果、および情報を伝える力が日本人は確実に弱いと感じます。問題は英語力ではなく(もちろんこれも問題ですが)、内容の面白さではなく(日本人はいい爪もつてますよ!)、内容を伝える力です。プレゼンテーションをするトレーニングを日本ではあまり受けませんが、国際社会では、きちんと自分の仕事を相手に見せるというスキルは、仕事そのものに関するスキルとともに重視されます。私が通っているMITでは、授業、研究グループ等の場での発表が頻繁にあります。私自身、月に1回は何かしらの形で発表しており、学部時代までにこういった経験がなかった分、それらの機会をより多く持ち、そして最大限に生かそうと努力しています。



エチオピアの子供たちと。フィールドに足を運ぶといつも子供たちの笑顔とキスとおねだりに囲まれる。写真は現地人に頼むといつもぶれるかフレームがあわない。

コミュニケーションを楽しむ力

国際社会というんですから、いろんな国から、いろんな価値観を持った、いろんな人が集まるわけです。そういった違いを認識して、理解して相手に接するということが大事だということはよく言われます。共通項が希薄な中で自分を売り込むにはネットワーキング力が大事だなんというのも周知の事実だと思います。私自身は、ネットワーキング力というものに自信はないのですが、コミュニケーションを楽しむということには自信があります。おそらく、ここで重要なのは、前項でお話した自分を売り込む力ではなく、自分が相手のことをどれだけ敬意と関心を持って知りたいと思うかなんではないでしょうか。価値観の違いに違和感を覚えるのではなく、価値観の違いを面白いものにとらえ、リスペクトし、もっと知りたいと思う、それがコミュニケーション力につながると思っています。

私は毎年2か月くらい、エチオピアでフィールド調査を行っています。現地では、レストランで昼食を出されるのに30分も待ちぼうける場合、調査地までバスに詰め込まれて行く1時間の旅路、調査地で貧困ラインぎりぎりの環境に住む過程で昼食を振舞ってもらった場合(といってもスクランブルエッグかジャガイモを煮たものしか出されませんが)など、よくエチオピア人と話します。彼らのつたない英語と、私の本当に限られたアムハラ語を使ってコミュニケーションします。生活の苦勞話から、宗教教義、政治の在り方など、たまに私の考えと相いれない話になるときもありますが、彼らのことをも

っとよく知る上でも、すべての会話が貴重で、そしてそれらの会話がとても楽しいです。

また、学科内での友達、教授とのコミュニケーションも大切にしています。私のラボのあるMITの建物は小さく、人が多くないので、その建物の人はほぼ顔見知りという状況です。その建物にはコモンキッチンがあって、昼食をそこでとることができます。研究が忙しいと、どうしても自分のオフィスで仕事をしながら動かす口は昼食にあて、動かす頭は研究に充てたくなるのですが、そこであえて30分でも時間をとり、友達とチャットするのに口と頭を動かす、というのは、毎日続けるとよいコミュニケーションのトレーニングになります。話す内容が研究のことであれ、政治のことであれ、ちゃらけた内容であっても、友人の考えを聞き、自分の考えを共有し、一緒に笑うというのは、費用対効果という話は抜きにして、楽しいです。こんな日々のトレーニング&それを楽しんでいるマインドセットが、ひいてはセミナーや学会、就職活動なんかで、誰かと話すときのコミュニケーション力につながるんでないかと思います。

チャレンジ精神

町→県→日本→世界にでてきて、大体のことを見終えたかという、もちろんのことそうではありません。日本という枠を越えて、“世界”に出てみると、自分に足りていないこと、自分が知らないこと、まだ見ていない面白いことに気づくようになります。また、MITで博士課程をしているんだから、卒業後は安泰だ、なんてことも全くありません。これからアカデミアに進むにしても、国際機関で働くにしても、常に競争があって、そこで勝ち抜いていかなければなりません。厳しいこともたくさんありますが、やはり、日本を地理的に出てから、国際社会を意識して見えてきた景色にはそれだけの価値があります。みなさんも、国際社会で活躍したいのであれば、さまざまなことにチャレンジし、武器を身につけ、そしてそれらすべての困難も自身の成長とともに楽しんでいただければと思います。私のような小娘が大それたことを言って恐縮ですが、自己啓発と、私のようになんてことのない田舎者だって活躍できるのだという啓蒙をかねて。



遠藤礼子
Ph.D. Candidate
Civil and Environmental Engineering
Massachusetts Institute of Technology

寄稿: ニュージーランドPh.D.生活

私は2012年2月からニュージーランドのオタゴ大学(University of Otago)にてPh.D.の学生をしており、ミューラー管抑制因子のレセプターや制御機構についての研究を行っています。現在は一通りの実験を終え、博士論文の執筆中です。留学と言えばアメリカが王道ですが、アメリカ以外でのPh.D.取得や生活について、興味がある方々の一助になればと思い、執筆させていただきます。

なぜ海外へ行き着いたか

そもそも私が海外に憧れ始めたのは高校生の頃に遡ります。アメリカのワシントン州のあるポートエンジェルス高校との姉妹校締結式、さらに姉妹都市の調印式に出席する使節団に選ばれたことがきっかけでした。英語が得意ではなかった私は派遣期間に上手く英語でコミュニケーションを取れなかったことがとても悔しく、さらにはまたいつかアメリカに行きたいという強い思いを抱きました。大学時代にはテネシー大学に交換留学し、今度は大学院で正規留学がしたいという想いに駆られました。それでも自分の英語力は海外でPh.D.を始めるまでにはまだ満たなかったため、英語の学力を伸ばしつつ、修士号は東北大学で取得しました。その頃自分の進みたい方向はメディカルサイエンスだと確信に近づいていたので、その先生のいらっしゃった研究室にアポイントを取ってみることにしました。受け入れ先もちょうど学生を捜していたようで、特に問題なく話が決まりました。ニュージーランドの他にも、ドイツやアメリカなどの大学院にアプライはしましたが、ニュージーランドのいい点は、修士と博士が一環でなく日本のように別れているので、修士号の年数をもう一度やり直す必要がなかったことです。アメリカはその点、私の分野では博士一環が普通なので、かなりの長丁場になるわけです。

University of Otagoでの学生生活

ニュージーランドへは入学前に来たことが無かったので、実際来てから様々なカルチャーショックを受けました。アメリカとはまた違った風土を持っていて、基本的に人々はのんびりとしています。私の住むダニーデンは南島の東南にあり、南極からの海流があるために夏でも海は冷たくて泳げないのですが、キャンパスから15分ほど車を走らせればペンギンやアザラシ、トド(Fig.1)などを年中見ることができます。もちろん羊の放牧もあちこちでされているので、最初に到着する際に飛行機の上から米粒のような羊がたくさん見えたのが印象的でその時の感動は今でも忘れません。

オタゴ大学はニュージーランドに2つあるメディカルスクールのうちのひとつを有し、医学研究が盛んです。こちらの大学院の特徴として、授業を受ける必要がないということが挙げられます。これは、私のように英語力にあまり自信の無い者にとっては助かりました。さらに入学が一年のうちいつでも可能だということも特徴的でかなりフレキシブルです。そのため、学部卒業後に放浪の旅に出て帰ってきてから修士を始めたなどという人もいますし、博士課程

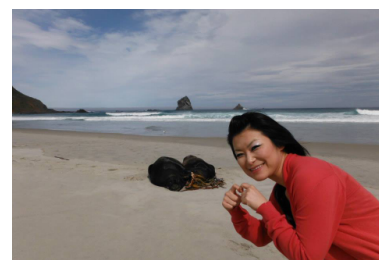
の途中で2ヶ月休学して旅行に出る人もいます。ニュージーランド人は家族を大事にし、男女ともに家事や子育てをするのが一般的で職員のほとんどは教授であっても5時になると帰ります。さすがにPh.D.の学生となるとそうもいかないようですが、効率よく仕事をできている人は早く帰ったり、実験の無い学生などは研究室に来ないで家でライティングする人も少なくないです。とにかく自由なので、色々な考え方の人がいますし、自分としてもこの留学をすることによって考え方の幅が出たという感じがします。

私が研究室に所属して最初に驚いたのはすぐ博士論文を書き始めるように言われたことです。でも今思うとこれは非常に効率が良かったと思います。さらに、授業を取る必要がないわけですから最初から自分の実験に専念することができます。もちろん、授業を取りたい場合はそうすることもできるのですが、周りの学生は研究だけに没頭しています。アメリカで言うところのTAにあたるのはデモンストレーターと呼ばれ、これをするだけで収入にはなるのですが、だいたい学生は大学からの奨学金を受けており、学費と月の奨学金が出るので、アルバイトをしなくても特に問題なく生活できるようにはなっています。

男女の垣根の無い国

男女共同参画先進国であるニュージーランドだけあって女性のPI(研究室主宰者)が多いのも特徴的で、わたしのいるDepartment of AnatomyではPh.D.の学生は女子の方が多いですし、他学部を見ても、日本に比べるとPh.D.を目指す女子の数が多いです。ニュージーランドの女性はとても積極的で、セミナーなどに参加した際に発言するのはむしろ女性の方が多いくらいです。

ニュージーランドでPh.D.をするメリットは、英語がネイティブの国で研究に没頭することができることではないでしょうか。ラボローテーションもなく、優秀であれば最短で2年半で学位を取得することが可能です。外国人に対する奨学金も充実していますし、オタゴ大学の場合はキャンパス近くに住む学生がほとんどなので、徒歩圏内で家と大学を行き来することができます。景色がとても美しい国に住むニュージーランド人はアクティブなので、週末になるとトランピング(ハイキング)にいく学生も多いです。安全で自然豊かなこの地であなたもPh.D.を始めて見ませんか?質問などありましたらお気軽にご連絡下さい。



キャンパス近くのビーチでトドのカップルと。

川岸 由
Ph.D. candidate in Department of Anatomy
University of Otago
kimono_gozen@hotmail.com

寄稿: Life as a Ph.D. Student and an Assistant Professor in Economics

最初に自分自身の略歴を書いておくと、東京大学経済学修士課程、プリンストン大学経済学博士課程を経て、現在Stanford Graduate School of Businessの助教授(日本語訳は諸説あるけど、英語でassistant professor)をしている。本稿では、私自身の学生生活と教員生活を、学生のとときの視点と教員になってからの視点双方から振り返ってみようという試みである。

経済学博士課程のコースワーク

経済学の博士課程は基本的に初めの2年間、(日本でおなじみの、基本的に先生がしゃべって説明する)授業を受ける。なぜかという、経済学はかなり体系化されていて、必要な手法や基礎知識を詰め込まないと先へ進めない、という側面があるからだ。ここで成績が悪いとプログラムから除名されるということもあって、学生のころは結構心配していた。

プリンストンでは初めの1年間でミクロ経済学、マクロ経済学、計量経済学を全員が履修して、2年目に各自の興味に合わせてもう少し専門的な授業(ミクロ経済理論、開発経済学など)を選択履修する。成績は基本的に試験で決まり、GPAが悪かったりすると退学になる。2年目の終わりに進級試験(期末試験より通常難しく試験範囲も広い)があって、それに通らなくても退学になる。大学によっては1年目の終わりに進級試験がある場合もあるし、プリンストンはほとんど全員が進級できるが、半数近くが退学になる大学もある。

日本からの留学生の場合は経済学をやろう、と心に決めてやってくる人が多いので、この進級試験はわりとプレッシャーである(逆にアメリカ人の同級生には、まあ試験に通らなかつたら向いてないってことだからどこかに就職しよう、と考えている人が多かった)。しかも経済学と一言でいっても分野ごとにかかなりの差があるので、僕のようにミクロ経済理論をやろうと決めていても、マクロ経済学の試験勉強をやらないといけないのはわりと苦痛である。

教員になってから学生たちを見ていると、ちょっと試験に神経を使いすぎているという感じもする反面、試験がないと嫌いな科目を勉強しないというのも正しいのでなんともいえないところである。僕の場合、マクロ経済学や計量経済学のように一見関係ないことをちゃんと勉強したおかげで研究に直接役に立つこともあったし、就職してからは分野を超えて同世代の同僚と雑談したりすることもあるので(大学院の場合1学年20人以上はいるのでミクロ経済理論をやっている人だけで話していても結構な人数になるけど、教員になったらassistant professorの数は学部全体で10人くらいである)、他の分野を知っていることはいろいろ大事である。

試験勉強と研究のバランス

とはいうものの、試験の成績とその後の研究業績の相関が必ず

しも高くないというのも事実である。ある大学を退学になった人が、他の大学に移って、そこで大成して良い研究者になった、という話はちらほら聞く(ただし、退学になってその後アカデミアに帰ってこない人も 話に聞かないだけでいっぱいいるはずなのでどれだけの頻度かはよく分からない。特例だから目立つのかも)。ということで、最近では、2年目の終わりに短いリサーチペーパーを課して、試験とそのペーパーの両方で評価するようになってきているような気がする。例えば、スタンフォードの経済学部では進級試験を廃止して、学生に早くから研究させようとしているらしい。

こうした背景には、博士課程の「中だるみ」現象というのがあるような気がする。経済学では理系のように研究室に配属、などのシステムがないので、基本的に自分で研究して、進展があれば(もしくは進展がなくて困ったら)指導教官に会いに行く、というのが普通である。2年目に進級試験に合格すると、卒業までまだ3年あって、当座のプレッシャーから解放されるので、切迫感があまりなくなる。授業を受けて勉強することから論文を自分で書くことへシフトするのが難しいこともあって、あんまり研究が進まなくなることがある。

自分が学生のとときは、あんまり進展がないと指導教官に会いに行くのが憚られた気がするが、自分が教官になってみると、報告がない学生の方が困りものである。きちんと努力したことが示せれば(こういう問題を考えていて、こういう先行研究を読んで、こういうことをしてみたんだけど全然うまく行かないとちゃんと説明できるとか)、研究が進まないときこそ指導教官に会いに行つたほうが良い、というのが教官側からの視点であるので、学生の皆さんは怖気づかずにアポイントメントを取りましょう。(もちろん大学のカルチャーにもよるので保証は出来かねますが、)早めにアドバイスをもらった方が良いでしょう。



大学院の卒業式で。経済学博士家庭の仲間達と。

学生から教授職へ

ということで、進級試験をパスして、指導教官のアドバイスのもとでペーパーを書いたら就職活動する、ということになる。紙面が限られているので、この点は東京大学の修士課程で僕と同期だった上武君の原稿をご覧ください。

僕の場合は就職活動の結果、ビジネススクールに就職することになった。アメリカのいくつかのビジネススクールでは経済学者を雇っていて、僕らは基本的に経済の研究を普通の経済学部の先生たちのようにやっていて、ティーチングだけMBAの学生さんを教える、ということになっている。僕もまだ試行錯誤の最中なのでなんともしないものの、MBAの学生さんたちは、この授業を取って自分の人生の何に役に立つのか、というところをうまくmotivateすると、かなり熱心になってくれるので面白いものの、逆にmotivateする部分がうまくいかないと、丁寧に分かりやすく授業をしてもあまり評価されない。例えば、スタンフォードの場合、1学年をいくつかのsubclassに分けて、何人かの人でsubclassを教える。試験問題は全subclass共通で、他の経験豊富な先生のsubclassと比べて自分のクラスの平均点が高かったとしても、授業評価は僕のほうが低かったりする。僕は(というか他の若手の先生も総じて)基本的にアカデミックな興味から経済学を学んできたので、こころのmotivationが弱い部分である。

ティーチングの差を別にするにすると研究面ではビジネススクールと経済学部の差はほとんどない。研究生生活をすべて書くには紙面が足りないし(研究しなくちゃいけないし)、教員の生活についてはスタンフォードの同僚の小島さんのエッセイ²をご覧ください。

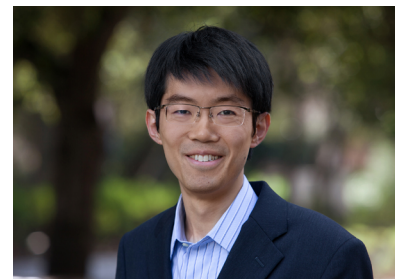
教授としての仕事

アメリカのアカデミアでassistant professorとして就職すると、初めの6から7年は終身雇用なし(un-tenured)のassistant pro-

fessorとして雇われて、7か8年目に終身雇用(tenure)のための審査がある。基本的に経済の査読誌に載った論文を評価されて、それが通れば自分が居たい限り今居る大学に残れる。(前述の小島さんは4年目に異例の終身雇用契約に昇進しました。すごいですね。)

実はこの査読誌へ論文を出版するというプロセス、経済学はこのプロセスに長い時間がかかることで悪名高いのです。どのくらい時間がかかるかというと、すんなりいって2年、査読者に色々要求されるとそれ以上かかる。ということは7年目までに出版するためには5年目(僕にとってはあと2年!)の間に論文の原型を書いておかないといけない。

授業の準備とか、日本とは比べ物にならないくらい少ない量だけど事務作業とかもあるので、自分の感触としては、大学院生のときより研究する時間は少ない、という感覚がある。(あんまりこういう年寄りくさいことは書きたくないんだけど)大学院生の方々は今のうちに研究しておいたほうが良いですよ。



菅谷 拓生
Assistant Professor of Economics
Graduate School of Business
Stanford University

【参考文献】

- 1: 上武康亮『経済学Ph.D.のアカデミア就職』(かけはし, 2013年5月号) <http://gakuiryugaku.net/newsletters/2349>
- 2: 小島武仁『スタンフォードの研究室から、経済学者の見る風景』(東洋経済 online) <http://toyokeizai.net/category/f-kojima>

告知: 全国8大学で留学説明会を開催します

米国大学院学生会は、2015年夏に全国8大学で海外大学院留学説明会を行います。学位留学経験者による講演を通して、海外大学院への進学に関する手続き、学生生活、研究の進め方等について生の声が聞ける貴重な機会です。パネルディスカッションや懇親会も企画されており、学位留学経験者と直接話すこともできます。参加費はどの会場も無料です。事前参加登録、説明会の日程・場所、講演者に関する情報は随時アップデートされますので、米国大学院学生会のHPへアクセスし各会場の詳細をご覧ください(<http://gakuiryugaku.net>)。

2015年夏の海外大学院留学説明会 開催情報

- | | |
|--|---|
| 7月上旬 @立命館大学 4pm - 6pm(予定)
会場未定 | 7月25日(土) @東京大学 4pm-
本郷キャンパス 工学部2号館 213 |
| 7月10日(金) @名古屋大学 6pm - 8pm
国際教育交流センター2階 | 8月4日(火) @東北大学(時間未定)
会場未定 |
| 7月11日(土) @東京工業大学(時間未定)
会場未定 | 8月7日(金) @大阪府立大学 4pm-
会場未定 |
| 7月14日(火) @北海道大学 夜予定
留学生センター1階大会議室2(111号室) | その他、今年度は新企画、SoP(Statement of Purpose)講座が東京大学で5/28、5/29、6/1に開催されました。 |
| 7月14日(火) @筑波大学(時間未定)
会場未定 | |

連載: 留学前に教えてほしかったアメリカ大学院の仕組みと仕掛け (2) 大学院ランキングの読み方と研究室選び

前回の記事「効果的な推薦状を書いてもらうために」の中で、私が合格したアメリカの大学院の中から、ランキングでは一番低いUCSBを進学先にした話を紹介しました。今回の記事では、その理由について説明するために、大学ランキングの仕組みを解説し、また、志望研究室を選ぶ際のアドバイスをしたいと思います。

大学ランキングの仕組み

大学ランキングは良くも悪くも順位付けをすることを目的としていて、出願予定の学生にとっては無数にある大学から志望校を選ぶにあたってわかりやすい指標です。有名なものとしては、世界の大学を対象としているTimes Higher Educationのランキングや、アメリカの大学を順位付けしているU.S. Newsのランキングなどがありますが、そもそもどうやって点数をつけているのでしょうか？ここでは、定評のあるQuacquarelli Symonds(QS)社のランキングの仕組みを例にとって解説していきます。

QSランキングには大学の総合ランキング、学部別のランキング、そして学科レベルの分野別ランキングがあります。総合ランキングは研究者からの評判(40%)、雇用者からの評判(10%)、教員あたりの学生数(20%)、教員あたりの論文被引用数(20%)、留学生比率(5%)、外国人教員比率(5%)の6つの指標から順位付けしたものです。学部別や分野別のランキングでは留学生と外国人教員比率を除いた4つの指標から算出していて、学部や分野によって重み付けを調整しています。このように、ランキングは「評判」という主観的な評価が半分程度を占めているため、みんなから「良い大学」と思われているところが上位に来るという仕組みになっています。

では次は、大学院出願予定の学生として、このランキングをどのように利用すべきか考えてみます。まず、上で解説したように、ランキングは大学の研究力を順位付けしたものでなく、主に評判を順位付けした「ブランド力」ランキングとして考えることができます。確かによく見聞きする大学名が上位に入っているため、学位取得後に企業に就職したり起業するなどアカデミアから離れる場合には、そのブランド力が役に立つはずですが。

研究者を目指すなら研究室をじっくり選ぶ

逆に、研究者になるつもりであれば、学位取得後にモノを言うのは出身大学のブランドではなく、自分の研究業績です。そのため、

大学院留学の成否を握ると言っても過言ではないほど重要になるのが研究室選びです。もちろん研究成果を出すために一番重要なのは自分の実力ですが、やはり力を発揮するためには研究室の環境も大事です。指導教員の能力に加えて研究資金や設備、同僚の学生やポスドクなど、研究を効率的に進めるためにはさまざまな資源が必要です。私がランキングでは低い大学に進学した理由は、ここにあります。ブランド力1位の大学で普通程度の研究室に入るより、20位の大学だとしても、ものすごい成果を出している実力No.1の研究室に入る方を選んだのです。

さて、アメリカでは、そのように環境が整っている有力研究室が上位30校くらいに広く分布しているので、ランキングに惑わされずに丁寧に調査することが大切です。ランキングや指標の値を鵜呑みにせず、あくまでも良い研究室を見つけるための大雑把な参考情報として役立てると良いでしょう。出願当時、私はランキングのトップ10校程度のホームページを見て研究テーマに興味を持てる研究室について調べたほか、学部時代の指導教員にオススメを聞きましたが、今考えるとやや不十分です。もし私が15年前に戻れるならば、トップ30校くらいまで対象校を広げたいところです。志望する研究分野が決まっていれば、その分野の教員に権威のある国際会議を教えてもらい、最近の招待講演者リストを調べると効率的です。



2005年、留学当時の研究室メンバーと。(前の段、真ん中に座っているのが私です。)

このようにしてある程度の研究室をリストアップできたら、良い成果を多く出しているかどうか確認してみましょう。学部生の段階で論文リストから良し悪しを見極めるのは難しいと思うので、比較的便利なh-indexという指標を紹介します。これは、h回以上引用されている論文がh本ある、ということを示す数値で、量と質を同時に反映していると考えられます。Google scholar

本記事は大学院合格と配属先の研究室が同時に決まるプログラム(例えば工学系Ph.D.)への出願を考えている方にとって特に重要になります。入学後にローテーションと呼ばれる複数の研究室を試す期間のあるプログラム(生命科学系に多い)に応募する方も、事前に研究室に目星をつけておきましょう。また入学後にローテーションで研究室を決める場合、志望する研究室が複数ある大学院に進学した方が良いでしょう。研究室訪問は学校選びにも役立つのはもちろんのこと、資金調達の難しい分野(例えば生態学系)ではたとえどんなに良い研究室でも受け入れる学生の数はかなり限定されます。事前に教授に連絡したことが縁で研究室に優先的に受け入れてもらえたりすることもあります。(編集部)

やResearcher IDなどに登録されていればウェブで確認できますし、Web of Scienceを使って算出することもできます。注意事項としては、異なる分野の比較には使えないことと、年配の研究者になるほど自然と数値が高くなることです。総合的にh-index、研究テーマ、教員の年齢などを考慮して志望研究室を選ぶとよいでしょう。

研究室を訪問しましょう

最後に、研究室選びに役立つだけでなく、他の出願者に差をつける方法を紹介します。それは実際に研究室を訪問して、教授や学生と直に話してことです。自分のCVを渡して教授に自己アピールしてくれるのはかなりインパクトがあり、印象に残ります。外国人の出願は新興国からのものが多く、訪問できるほど経済的に余裕のある人はまずいないので有利になります。また、直接話すことによって英語能力を確認することができると、教授も安心します。そして、何より大切なのは、これから5-6年一緒に過ごすことになる教授や学生たちと仲良くやっていけそうか、大学と研究室の雰囲気や自分の直感で確認することです。私は研究室訪問の際に、学生たちがすごく楽しそうに研究について説明してくれる様子を見

て、ここなら思う存分頑張れる、と感じました。今思うと、これが進学先を決める上でかなり大きなウェイトを占めていました。Ph.D.を取った後、研究者になる道を選べば教授との付き合いは一生続きます。自分と相性の良い人を選びたいですね。



加藤 雄一郎
東京大学 工学研究科 総合研究機構 准教授
University of California Santa Barbara Ph.D. 取得

現在の研究テーマであるカーボンナノチューブ光デバイスに関する研究が中心ですが、私の個人ページに留学関係の過去の文章が掲載されています。
<http://ykkato.t.u-tokyo.ac.jp/>

米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

原 健太郎 石原 圭祐 高野 陽平
山田 亜紀 辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中!

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります!

この度、おかげさまで無事に就職も決まり、博士号の取得も最終段階にたどり着き、怒涛の博士課程生活も終わりに近づいてきたと感じる今日この頃です。ニュースレターを通して数多くの日本人大学院生の皆様と触れ合うことができました。自身もまたそのうちの一人であったことを、今更ながら感慨深く思います。決して短かったとは言えない大学院生活でしたが、この会に所属することによって、有益な経験を積むと同時に、幅広いネットワークを構築することができました。改めて、アメリカに留学して本当によかったなと切実に感じます。(山田)

先日初めてポスドクのアプリケーションというものを書きました。自分にははっ

きり言ってまだ先の話ですが、編集部の他の方は皆いよいよ大学院生としての生活が終わる頃ですね。研究者としてはまだまだ先は長いですがとりあえずひとつの節目です。母曰く、研究職はマラソンのようなもの。短距離走のスピードで走っては最後まで持ちません。一息ついて振り返るのも良いのではないかと思います。(辻井)

夏学期は地球環境科学入門のTAを担当しています。入門ということもあり、幅広いバックグラウンドの学生さんが受講しており、受講生の素朴な疑問を通して好奇心や何気ない事を不思議に思う事の大切さを再認識しています。そんな僕の最近気になる事は”固い”モッツアレラ

チーズ。モッツアレラチーズといえば柔らかいイメージですが、”固い”とはどういうことか?ということが妙に気になってます。そんなわけで学生さん達に触発された事もあり、最近スーパーのチーズコーナーの人にいろいろと気になる事を質問しています。勉強の成果はまた次回書きたいと思います。(高野)

ぼくも今月Ph.D.を取得しました。現在、ポスドクやっています。「手を動かす」と「頭を動かす」ことを両方できるかどうか。この二つのiterationをどれだけ多くできるかどうか。どちらかをさぼると、他方がうまくいなくなる。そんなことを学んだPh.D.でした。(原)